Theater Association of KANAGAWA
TAK

DRAMA かながわ

NO.84
Theater Association of Kanagawa　November 2021

青少年のための芝居塾2021「ギンテツ」

TAK in KAAT「ヨコハマ・ヤタロウ～望郷篇～」／僕らの観劇
第19回かながわ演劇博覧会に向けて／オススメの書籍／資料室だより ほか

青少年のための芝居塾2021「ギンテツ」

【総評】文：木村健三（マシュマロ・ウェーブ）

感染症予防対策を万全にして臨んだ今年度の芝居塾。参加塾生の地道な日々の努力、県やセンターのご担当者と神奈川県演劇連盟（以下：ＴＡＫ）の皆さんの手厚いサポートにより、有観客公演として実施し予定通りの日程で無事に閉塾式を終えることができました。あらためて感謝いたします。

今回の芝居塾は感染症対策への理解と実践の大切さを伝えることから始まった。「ギンテツ」は、会場であるスタジオＨＩＫＡＲＩの座席数を半数にする準備から始まり、緊急事態宣言の発出により最終的には３分の１以下の４０席での上演となり、当日券を取りやめ関係者を通してのみの完全予約制に変更することで実施が可能となった。

４０席を超える予約はお断りしたため、学校の部活等のまとめ予約の多くが感染症拡大のためにキャンセルになったり、出演者の親族も高齢者を中心に当日キャンセルとなるなどして集客に関してはかなり苦しんだ。

しかし客席には高校演劇講習会出席者や演劇に興味を持った高校生、友人の出演をきっかけに来場した学生といった若い世代が多く、芝居塾のテーマである「若い世代に演劇に親しんでもらう」ことができ、ＴＡＫの存在意義を強くアピールできた。

参加塾生に関しては、前回の２０１９年度から続けて参加したり、２０１９年度の「ギンテツ」を観て参加した塾生が多かったことから、同じ劇団が継続して担当することの重要性を再認識した。担当３年目となる来年度も「ギンテツ」を観たいという多くの声をいただき、期待に応えられるようしっかり準備を進めたい。

近年高校の二学期開始時期が早まり、２０１９年・２０２１年ともに高校生の夏休みが終わった時期と公演が重なることから、全ての回には参加ができない塾生がいた。また集客に関しても塾生が観て欲しい友人に観てもらえなかったりもした。今後はお盆時期に会場を押さえて公演をおこない、スケジュールに対応出来ず参加を見合わせるといったケースをできるだけ減らしたい。

芝居塾2021　参加者の声

公演中、舞台で照明に照らされ、生演奏による音楽を耳に「ギンテツ」の世界を『生きて』いた瞬間は今も目蓋に映ります。はじめは演劇初心者であり年齢差もあることから塾生同士仲良くなれるか心配でしたが、終わった今ではこのメンバーだったからこそ、ここまでの作品を作れたのだと自信をもって言えます。このコロナ禍、多くの人々に支えられて成し遂げることが出来た公演です。感謝の気持ちでいっぱいです。（湯原庸輔）

芝居塾は年齢層が広く、経験者も未経験者も参加していました。その様な環境でお芝居をすることはなかなか無いのでとても新鮮で楽しかったです。ギンテツの稽古に入る前は様々なワークショップを行い、セリフを覚えて演じることの難しさや一から舞台を創る大変さなどを学びました。そこで得たものは、ギンテツの稽古に活かすことが出来ました。本番中のハプニングも含め、全てが成長に繋がるとても濃い時間を過ごせました。（杉原樹）

私は会社員で、芝居経験が無く入塾しました。セリフテスト等を通じて、「大きな声で堂々と演技ができてる」と言われ、自信を持って公演に臨むことができました。芝居経験豊富な学生や音楽関係に強い社会人といった仲間に刺激されたからこそ、仕事後のハードな稽古も全く辛くはなかったです。皆で芝居を創り上げることがこんなに楽しいとは思わなかったです。改めて一夏に貴重な体験ができる企画は芝居塾しかないと感じました。（河原敏明）

千秋楽の日、最後のカーテンコールでハケて先に楽屋に戻った仲間が待っていてハイタッチしてくれたときに、今までの思い出や安心感や達成感、何より終わってしまったんだなぁという思いが溢れて涙がこぼれてきました。稽古の日の休憩時間のみんなとの会話なども全部、私の青春でした。参加してよかったと心から思っています。泣いたり笑ったり感情がたくさん動いた素敵な２０２１年の夏でした。（佐藤咲奈）

劇評　芝居塾2021「ギンテツ」

文：神奈川県演劇連盟理事長　横田和弘（劇団河童座）

客席に着くと上演前から塾生たちの生演奏。舞台は床の上の白いテープの大きな輪。そして移動可能な置き道具が数点。シンプルだけれど本番前から宮沢賢治・銀河鉄道の世界観が醸し出されていた。

「銀河鉄道の夜」は様々な脚色・演出でアプローチされてきた演目だけれど、この「ギンテツ」も確かに独特の世界を作り出していた。

白いサークルは宇宙をイメージしたものなのか、その周りと中をうまく使い暗転なしでテンポ良く進む舞台は、好感が持てた。

さらにもまして好感が持てたのは、演出から出されたであろう様々な注文を夢中になってこなす姿、真面目さが舞台にも滲み出ていて清々しい作品に感じられた。３ヶ月間の稽古、８ステージの長丁場を駆け抜けてきた成果は充分に発揮されていた。

講習会の発表会というよりは一つの作品としての仕上がりを見せていた感じがした。

今年度の芝居塾は、コロナ禍の中、様々な苦労があったと思われる。この時期に公演がこのような形で実現できたこと、それ自体が奇跡的だったように思われる。実現に漕ぎ着けるために多大な協力をしてくれた神奈川県、青少年センターホール運営課の関係者、マシュマロ・ウェーブのメンバーには感謝したい。さらにはその協力を引き出したのは、真摯に取り組む塾生たちの姿勢だったと思う。芝居塾の参加者に本当に感謝、感謝。

今年の芝居塾「ギンテツ」も大成功だった。拍手！

【総評】文：中山朋文（theater 045 syndicate）

私たちtheater 045 syndicate は、メンバー個々での活動や他団体とのコラボレーション公演は数多く行ってきていましたが、劇場での本公演の回数は少なく、しかも客席１００席規模の小劇場（県内、県外ふくめ）を中心に活動してきました。今回のTAK in KAAT は私たちにとっては大きな冒険でした。オリンピック・パラリンピックが終わった後の感染者数の爆発的な増加、緊急事態宣言の度重なる延長・・・。いつカンパニー内で感染者が出てもおかしくない状況で無事に千秋楽を迎えられたのは、ひとえにこの公演に関わる全員が高い感染予防意識を持っていた結果であると思っております。

今回の作品『ヨコハマ・ヤタロウ～望郷篇～』は岸田國士戯曲賞受賞作家である佃典彦氏の書き下ろしであり、実力派のキャストをそろえての布陣であることも手伝い、ネット上でも大変な好評をいただきました。そして、実際にご来場いただいたお客様からは、全ステージでダブルコールをいただきました。シリーズ化を望む声も多く、今後も「ヨコハマ・ヤタロウ」を続けていくことを考えております。

観客動員については、大苦戦でありました。２日目である１０月１日に緊急事態宣言が明けたとはいえ、やはり夜間の外出や県をまたいでの移動の自粛は続いており、特に夜公演は集客に大変苦労いたしました。コロナ禍を受け、ＫＡＡＴ神奈川芸術劇場の大スタジオは客席を０．５席空け総客席数が１５０席程度となっていましたが、千秋楽以外は満席にすることができませんでした。

そこで感じたのが、地元神奈川のお客様の大切さです。いつ終わるか分からないコロナ禍で、地元の演劇を支えるのはやはり地元の観客なのだということを改めて実感いたしました。神奈川県演劇連盟の諸先輩方の努力で獲得したこのTAK in KAAT という枠は、加盟団体の作品をより多くのお客様に観ていただくことができる事業です。更なる良質な作品を発表することが、地元のお客様を増やすことにつながると感じております。

劇評　TAK in KAAT「ヨコハマ・ヤタロウ～望郷篇～」

文：おおたにとも子（劇団かに座）

ヤタロウがヨコハマに帰ってきた――。

２０１８年１月、横浜市内の雑居ビルで『ヨコハマ・ヤタロウ』が初めて上演され、翌１９年に東京・下北沢でリニューアル。「掘り出しモノ！」と称されるほど、演劇ファンの間では話題になった作品だ。ＫＡＡＴ神奈川芸術劇場で行われた今回は演劇ファンにとってまさに待望の“帰還”だろう。

タイトルは『ヨコハマ・ヤタロウ～望郷篇～』。劇場の場所とは裏腹に、今回の舞台はヨコハマではない。ヨコハマに想いを馳せるヤタロウと、ヤタロウの思いなどつゆ知らず、法外的な手段でヨコハマを強引に変えようとする新しいヨコハマ市長の男の話だ。

ヤタロウが潜伏する場所は、関東某所の荒野。全国的に原因不明の砂嵐と雷鳴に見舞われ、外を歩くどころか、呼吸することも難しい。ヤタロウを長年追いかけまわしている刑事・モリスケがマスク姿で現れたときは、最近の世相を彷彿とさせた。

ヤタロウとモリスケが再会し、その後も舞台の中心となるのは、荒野の中に佇む銭湯の男湯。なぜか湯が張られておらず、泥と砂だらけの空の浴場から全裸のヤタロウが現れた。その後、アクションシーンも感動シーンも（ほぼ）全裸でやり遂げた。

妻を殺され、その復讐を果たしたヤタロウ。『望郷篇』では妻の墓があるヨコハマに帰らず、砂嵐のなかを放浪している。自分の命を狙ってくる破落戸を返り討ちにしながらも、死ぬ間際に彼らから「人生でやりたかったこと」を聞き出し、代わりに引き受けるという生活を続けているようだ。

さて、その頃ヨコハマは何が起きていたのか。これまでの話では、犯罪都市として描かれてきたが、新しいヨコハマ市長と秘書によって犯罪発生率０のクリーンな街に生まれ変わっていた。

その方法は、手術をともなう更生プログラム。手術の場面はトラブル連発で笑えたが、数分前まで元気に暴れ回っていた青年が、無感情のマシーンになってしまう様子にはゾッとする。

ヨコハマ市長以外にも注目すべき人物が多数登場した。執事を従えた若い「坊ちゃま」に、荒野で怪しい占術を生業とする占い三姉妹（自称）。銭湯でヤタロウの命を狙おうとした若者二人。そして、理由があってヤタロウと行動をともにすることになった少女・キク。

それぞれ物語の鍵を握っているように見えたが、性格も生い立ちもバラバラ。正体もよくわからない。観劇しながら、一体どんな結末を迎えるのだろうかと考えてしまったが、最後は見事に線で繋がった。鍵の形も開ける扉の種類も異なれど、それぞれの扉からたどり着く場所は、同じだったようだ。

上演時間はおよそ２時間。休憩なしのノンストップ。コロナ禍で映画館や美術館、劇場も思うように行けない日々が続いており、久しぶりの長時間の観劇で集中を切らさずにいられるか少し不安だったが、始まってしまえばあっという間。彼らの人生を覗き見するのに２時間は短すぎる。

もちろん『ヨコハマ・ヤタロウ』は、リアルな人間の人生ではなく、佃典彦氏が編み出した物語だ。それらを盛り立てる照明や音響、荒涼とした世界を緻密に彩る美術や衣装、何より自分の役を常に１００％全力で演じる役者たちの熱量に圧倒されっぱなしだった。公演を見終えて外に出た時、演劇を見てきたとは思えないほど体の火照りを感じたことを覚えている。（※念のため帰宅してから体温を測りましたが、完全に平熱でした。咳も不調もなく、今日もばりばり稽古に参加しています）

作者によると、『ヤタロウ』は第７部まである超大作。我々が目撃してきた彼らの物語は、まだ折り返し地点にも到達していないようだ。またヤタロウを目撃できる日を心待ちにしつつ、次は衣装に身を包んだ彼を見たいと、少し願う。

僕らの観劇

劇団こゆるぎ座

「相州名物 小田原提灯縁起」

■作：後藤翔如、演出：楠田正宏
■2021年10月16日～17日
■於：小田原三の丸ホール 大ホール

時代は江戸。小田原の提灯屋の物語。

まず大道具がすごい。作りこまれた江戸時代の民家が舞台に広がる。家の中が中心であるが、観客からは家の外も見える。さらに見えないはずのふすまの向こう側の別の部屋、村の外などもリアルな実在として感じられる。ディティールのしっかりした衣装、小道具、そして役者たちの演技力のたまものだろう。そこには提灯屋におさまらない、広がりを持つ世界が感じられた。

江戸時代の風習や伝統などがたくさん出てくるが、決して古臭さも退屈さも感じない。現代人と同じ人間として、笑ったり怒ったり悪ふざけをしたり家族を大切に思ったりと、キャラクターたちは生き生きと生活していた。子どもたちが役者として出てくるのも良い。元気に伸び伸びと演技していて実に微笑ましかった。

ストーリーは道中提灯が発明され、全国に広がり、小田原提灯として小田原を有名にしたという物語。実際にあった話だそうだ。小田原の歴史を一つ知ることができた。劇中の会話も、昔の人たちが本当にそういうセリフを喋っていたのかもしれない。

そんな中、狐憑きを巻き起こす狐が登場する。狐は人間の目には見えず神出鬼没。人にとりついたり人に化けて悪戯したりする。この物語のファンタジー要素としてとても良いアクセントになっていた。手を触れずに物を動かす、窓に影だけが映る、など舞台装置を使った仕掛けも面白かった。最後小田原提灯はたいそう評判になり、提灯屋は大繁盛する。すがすがしい気持ちになって劇場を出ることができた。

観劇後、帰る途中で小田原の蕎麦屋に立ち寄った。店内にはまさに小田原提灯が飾られており、今さっき観た劇の世界と地続きになったようで楽しく感じた。

文：穂村一彦（劇団「無題」）

G/9-Project

「リアル～真夜中の遊園地～」

■作／演出：仲尾玲二
■2021年10月23日
■於：かながわアートホール

演劇の世界では公演を控えたり、中止を含みで検討するといったコロナ騒動の影響が少なくない。しかし反面では芝居は見てもらってなんぼのもの、舞台を諦めることだけは絶対にしないとの決意を表明する劇団もいる。 G/9はどちらかといえば、社会的常識に富んだ劇団だと思うが、一方で芝居創りへの情熱が人一倍強い。

今回の舞台はそうした葛藤を経ての上演決定だったのではないだろうか。結果的に普通の公演を設定する際の常識に照らせば、なんとも破天荒なスケジューリングでの挑戦となった。土曜日に公演となれば普通なら次の日曜日を含めて２日公演とするところ。仕込みは金曜日だろう。ところが今回は、公演当日の土曜日に仕込みとばらし＆撤収をまとめてやってしまうという超ハードさ。だから、バラしを考えた結果舞台装置はシンプル。多分灯りの仕込みもそうだったかも。

いやいや芝居というのは、役者の身体を使って見せるもので、そこがしっかりしていれば成り立つんじゃない、みたいなつぶやきが聞こえる感じすらした。

G/9の芝居は、日常性をバックボーンにしつつどこかファンタジーな味わいを感じさせる作品が多いと思うが、今作もその流れである。そしてどこかに夢を見させてくれるような安らぎを持たせることを忘れない。だから観終わってなんとなくホンワリした気分にさせてくれる。例によって、団員の大多数を占める女優陣の存在感がしっかりしている点も安心できる。しかしその反面では二人の男優の作品中での位置取りというか果たすべき役割のピントがやや甘くなって見えてしまった。

とまれ、無茶苦茶スケジュールでも芝居やろう！と決めた情熱に敬意を表する。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

第19回かながわ演劇博覧会に向けて

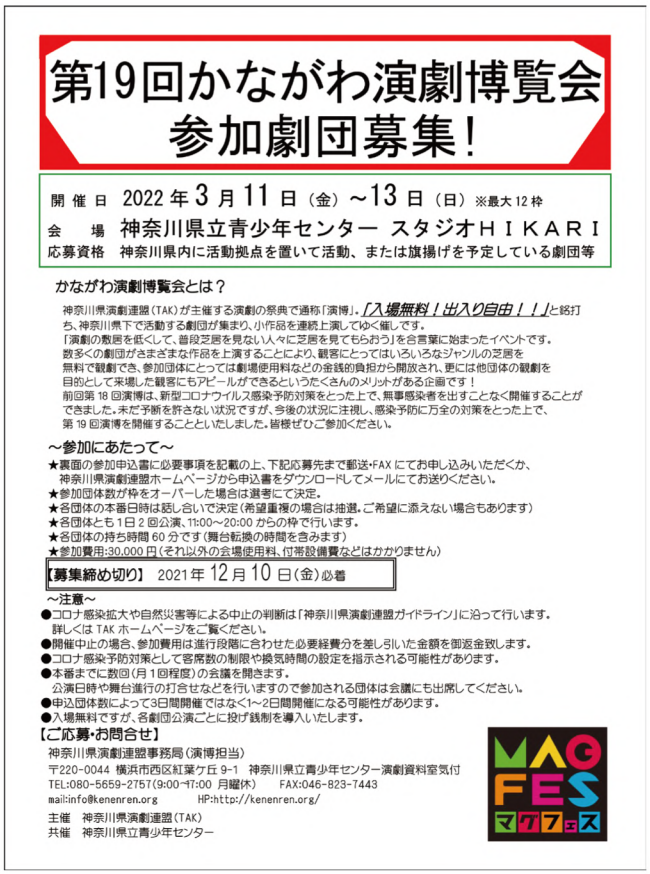
■開催日：2022年3月11日(金)～13日(日)予定
■会場：神奈川県立青少年センター スタジオHIKARI

参加団体募集中！

神奈川県下で活動する劇団が集まり小作品を連続上演する「かながわ演劇博覧会」※通称：演博（エンパク）。２００４年から始まり毎年１回の開催を続け、今回で１９回目を迎えることとなりました。前回は参加５団体と、新型コロナウイルスの影響があり少ない参加となりましたが、しっかりと感染予防対策を実施したことにより感染者を出すことなく無事に終えることができました。

演博は「入場無料！出入り自由！！」と銘打ち、これをウリとしてきました。しかしながら「出入り自由」に関しては、感染予防対策の観点から今回も予約制を導入する等の対策を講じる必要があります。ご来場いただくお客様・参加団体・スタッフ等、すべての方が安全な環境のもと楽しく開催できるよう尽力させていただきます。

そして、第１９回かながわ演劇博覧会に参加していただける団体を現在募集しております（募集締切：１２月１０日（金）必着）。詳しくは神奈川県演劇連盟ホームページをご覧ください。たくさんのご応募お待ちしております。



第19回かながわ演劇博覧会
参加劇団募集！

開 催 日　2022 年 3 月 11 日（金）～13 日（日）※最大 12 枠
会　　場　神奈川県立青少年センター スタジオＨＩＫＡＲＩ
応募資格　神奈川県内に活動拠点を置いて活動、または旗揚げを予定している劇団等

かながわ演劇博覧会とは？

神奈川県演劇連盟（TAK）が主催する演劇の祭典で通称「演博」。「入場無料！出入り自由！！」と銘打ち、神奈川県下で活動する劇団が集まり、小作品を連続上演してゆく催しです。
「演劇の敷居を低くして、普段芝居を見ない人々に芝居を見てもらおう」を合言葉に始まったイベントです。
数多くの劇団がさまざまな作品を上演することにより、観客にとってはいろいろなジャンルの芝居を無料で観劇でき、参加団体にとっては劇場使用料などの金銭的負担から開放され、更には他団体の観劇を目的として来場した観客にもアピールができるというたくさんのメリットがある企画です！
前回第 18 回演博は、新型コロナウイルス感染予防対策をとった上で、無事感染者を出すことなく開催することができました。未だ予断を許さない状況ですが、今後の状況に注視し、感染予防に万全の対策をとった上で、第 19 回演博を開催することといたしました。皆様ぜひご参加ください。

～参加にあたって～
★裏面の参加申込書に必要事項を記載の上、下記応募先まで郵送・FAX にてお申し込みいただくか、神奈川県演劇連盟ホームページから申込書をダウンロードしてメールにてお送りください。
★参加団体数が枠をオーバーした場合は選考にて決定。
★各団体の本番日時は話し合いで決定（希望重複の場合は抽選。ご希望に添えない場合もあります）
★各団体とも 1 日 2 回公演、11:00～20:00 からの枠で行います。
★各団体の持ち時間 60 分です（舞台転換の時間を含みます）
★参加費用:30,000 円（それ以外の会場使用料、付帯設備費などはかかりません）

【募集締め切り】 2021 年 12 月 10 日（金）必着

～注意～
●コロナ感染拡大や自然災害等による中止の判断は「神奈川県演劇連盟ガイドライン」に沿って行います。
詳しくは TAK ホームページをご覧ください。
●開催中止の場合、参加費用は進行段階に合わせた必要経費分を差し引いた金額を御返金致します。
●コロナ感染予防対策として客席数の制限や換気時間の設定を指示される可能性があります。
●本番までに数回（月 1 回程度）の会議を開きます。
公演日時や舞台進行の打合せなどを行いますので参加される団体は会議にも出席してください。
●申込団体数によって3日間開催ではなく1～2日間開催になる可能性があります。
●入場無料ですが、各劇団公演ごとに投げ銭制を導入いたします。

【ご応募・お問合せ】
神奈川県演劇連盟事務局（演博担当）
〒220-0044 横浜市西区紅葉ケ丘 9-1　神奈川県立青少年センター演劇資料室気付
TEL:080-5659-2757(9:00~17:00 月曜休)　FAX:046-823-7443
mail:info@kenenren.org　HP:http://kenenren.org/
主催　神奈川県演劇連盟（TAK）
共催　神奈川県立青少年センター

MAGFES マグフェス

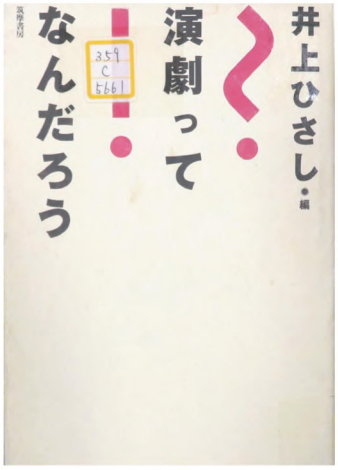
オススメの書籍

演劇資料室には多くの戯曲、演劇研究書や評論、さらには小説からノンフィクションまで、演劇や舞台芸術に関する多くの蔵書や資料が収められている。ボリュームとしては早稲田演劇博物館や国会図書館をもしのぐ。この膨大な蔵書・資料の山からお宝ともいえるお勧めの一冊を選んで紹介していく。

今回ご紹介するのは、劇作家であり自ら設立した劇団こまつ座の座付き作家である井上ひさし著の「演劇ってなんだろう」。こまつ座の広報誌である「ｔｈｅ座」の誌上対談を一冊にまとめたものだ。出演者は井上本人をはじめ、小田島雄志、大笹吉雄、扇田昭彦など日本演劇界を代表する論客である。毎回登場するゲストも楽しい。つかこうへい、木村光一、森光子、本多一夫、永六輔等々、多彩な顔ぶれだ。顔ぶれで脅かそうとの計算は井上ひさしには（多分？）なく、ただひたすらに演劇の楽しさ、素晴らしさを生で感じ取ってほしいとの想いが伝わってくる。

さらに単に楽しさだけでなく、演劇の持つ社会性や影響という面からも興味深いものがある。例えば下北沢の町の生い立ちである。もともとこの街は静かな住宅街だった。そこに演劇専門のシアターができて、続いてさまざまな規模や個性を持つシアターが作られ、若者が集まってきた。一つの劇場が街を作り変えてしまったわけだ。こうしたエピソードが芝居とか舞台とか役者とかいう演劇の枠を超えて一冊に詰め込まれている。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



■演劇ってなんだろう

井上ひさし編 著
筑摩書房 出版
判型:四六判
ページ数:292

演劇を成り立たせている要素、劇場、劇作家、演出家、俳優、プロデューサー、音楽などについて、井上ひさしがゲストを招いて語りあった、座談会形式の演劇論。

資料室だより

演劇資料室の仕事がどんなものなのか、あまり知られていないような気もするので、今回はスタッフたちが日々行っている業務についてご紹介したいと思う。

演劇資料室の仕事は多岐にわたっている。図書館司書と同じように、貸出やレファレンス（相談）の対応はもちろん、資料や書籍の管理・補修、戯曲や新聞・雑誌記事、公演情報のデータベース化（入力）など、どちらかといえば地味で根気のいる作業が多い。鹿爪らしい顔をしてパソコンや机に向かっているスタッフが何をしているか、不思議に思う人もいるだろうが、実はそんなことをしているのだ。

演劇資料室のデータベースのうち、一般によく活用されているのは、戯曲データベースである。これは主に演劇資料室に保管されている戯曲のタイトル・作者名（脚色者・訳者名）・出版社・発行年などから成っているが、特筆すべき点は登場人物の人数が男・女・その他に分類され数値化されていることだ。そのおかげで「男１名、女５名の脚本ってありますか？」というような問合わせにもやすやすと答えることができる。

ところがこのデータ、やっていることは実に地道で、ひとつひとつの戯曲を開き、登場人物表を確認しては入力する。それがない場合には戯曲を１ページ１ページ繰って、コツコツと人物の数を数えていく。中には名前だけでは性別などがわからないものがあったり、動物役をどう扱うか迷ったりと、なかなか厄介だ。けれども、その小さな積み重ねによって「男１名、女５名の戯曲」を瞬時に検索・リストアップできるのだ。

演劇という華やかな世界を支えているのは、俳優や演出家といった「目立つ存在」だけではもちろんない。みなさんが新しい舞台のための戯曲を探す時、検索結果が出てくる前にはこうした地道な作業があることをご理解いただけると嬉しい。もちろん、その作業を一緒にやっていただける人がいたら、さらに嬉しいことである。

文：井上学

演劇資料室

【開室時間】

平日（火曜～金曜）　13:00～22:00（貸出は21:30まで）

土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）

【休室日】

月曜、年末年始

※新型コロナウイルスの影響で開室時間に変更が生じております。
ホームページをご確認の上、お越しください。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ケ丘9-1
神奈川県立青少年センター2階　演劇資料室
電話：045-286-4485

今後の事業・公演予定

■劇団かに座『オイル089』2021/12/3～5、関内ホール・小ホール
■劇団河童座『日本発難民船物語　～令和版～』2021/12/4～5、横須賀市立青少年会館3Fホール
■劇団横濱にゅうくりあ『モノローグの可能性2021』2021/12/4～5,11～12、劇団本部アトリエ
■2021年度 神奈川県演劇連盟合同公演『（演目未定）』2022/3/11～13、神奈川県立青少年センター・紅葉坂ホール
■第19回かながわ演劇博覧会　2022/3/11～13、神奈川県立青少年センター・スタジオHIKARI

神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

■演劇プロデュース『螺旋階段』　■京浜協同劇団　■劇団蒼い群　■劇団河童座　■劇団かに座　■劇団唐ゼミ☆
■劇団こゆるぎ座　■劇団砂からマカロン　■劇団820製作所　■劇団「無題」　■劇団横濱にゅうくりあ
■theater 045 syndicate　■G/9-Project　■虹の素　■プラスティックな月　■マシュマロ･ウェーブ
■まりこ☆みゅーじあむ　■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)　■横浜小劇場（横浜演劇研究所附属）

DRAMAかながわ 84号

[発行] 神奈川県演劇連盟（2021年11月30日）
[編集] オッスたかのり(劇団かに座)、吉浜直樹(劇団横濱にゅうくりあ)、穂村一彦(劇団「無題」)、緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)、野比隆彦(studio salt)、波田野淳紘(劇団820製作所)
[ホームページ] http://kenenren.org/

ホームページ